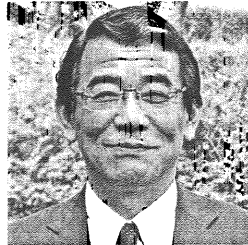


# 裏通りの東南アジア

## —東ティモールを訪れて考えたこと



拓殖大学 学長  
渡辺 利夫

この2月末、東ティモールを訪れる機会を得た。地域紛争の舞台がアフガニスタンやイラクに移り、東ティモールのことなどすっかり影が薄くなってしまったかの感がある。しかし、小国とはいえ、バリ島のわずか東方に位置するこの国は日本の安全保障に重大な影響を及ぼす地政学上の要衝である。

かつてはポルトガルの植民地に組み込まれ、後にインドネシアに併合されたものの、その屈辱的地位に甘んじることなく、住民の3人に1人を犠牲にする激しい闘争に挑んで、2002年5月に独立を果たした不羈<sup>ふき</sup>の国家が東ティモールである。

インドネシアからの独立派と併合派との「骨肉相食む」闘いの結果、独立は成ったとはいえ、国民の間に癒しがたい憎悪を潜在させてしまった。実際、インドネシア領西チモールに難民として逃れた2万人以上の東ティモール人が報復を恐れて帰還できないでいる。

インドネシア併合時代に国家機構の中枢を握っていた人材のすべてが東ティモールを去り、国家機構が麻痺状態にある。法秩序、治安、教育、

保険・衛生、インフラなどをいかに復旧させるか。国民国家形成のこれら諸条件を同時に満たすことができなければ、いつ紛争が再発しないとも限らない。そういう不安定な状態の中を東ティモールは漂っている。

内乱を収束させるのに大きな力を持ったのは、国連平和維持活動(PKO)であった。日本も過去最大規模の陸上自衛隊2,300名を派遣し、後方支援活動に従事した。独立後の政治的空洞を埋めたのも国連支援団であった。しかし、いまやPKOが去り、支援団の退出も今年の6月に迫っている。

東南アジアといえば誰しもASEAN諸国のことを思い浮かべるであろうが、これは「表通り」である。「裏通り」にはいまなお絶望的な貧困と政治的不安定性が残る。「裏通り」にたたずむ小国にも温かい目配りをつづけなければ、日本はアジアから真の尊敬と信頼を得られまい。

今回の私の東ティモール訪問は、独立闘争の志士にして現在の大統領グスマン氏に拓殖大学名誉博士号を授与するためのものであった。